

街の女マギー

ステイブ・クレイン作

牧草 泉

八

マギーはピートのことをあれこれ思い出すと、いま身に着けている服がひどく嫌になった。母親は、そのたびに嫌みたっぷりにマギーに言った。

「何をくよくよしててるのよ？ いつも格好ばかり気にして、やきもちやいてさ」

マギーは大通りで出会う華やかな服装をした女性たちを今まで以上に関心を持って眺めた。彼女らの上品な雰囲気やあらわに露出した肌、しなやかな手指がうらやましかった。彼女らが身に着けているアクセサリーを自分も身に着けて飾りたかった。それが女性としての欠かせない身だしなみに思えたからだ。

街で見る女たちは誰もがすてきな恋人の愛情に包まれてとても幸福そうに見えた。

マギーは、カラーやカフスを製造する工場の冷たい雰囲気

気を思い出すと窒息しそうだった。うらぶれた仕事部屋にいと、しだいに女らしさを失っていくように思えてならなかった。

薄汚れた窓は、そばを通る汽車が通過するたびにガタガタと音を立てた。あたり一面には騒音と悪臭が渦巻いていた。同じ部屋に一日中こもって働く初老の女たちを見ると、憂鬱になった。

彼女らは、若いころの華やかな生活や楽しかったパーティのこと、うちに残してきた赤ん坊のこと、さらには未払い賃金のことなどを、背を丸めて愚痴っぽく語りながら仕事をした。それはまるで自動裁縫機のように思われて仕方がなかった。

マギーは思った。「いつたい、いつまでこの若さを持ちこたえられるのだろう」と。すると、頬のふくよかな赤らみが何かとても大切なもののように感じられた。そうして、こんな希望のない生活を続けていくうちに、痩せこけて、愚痴ばかりこぼす女になっていくのではないだろうか、という不安がよぎるのだった。

マギーは思った。「ピートはきつと、女性の身なりについては大変うるさいんだ」と。

「誰でもいい、この工場の持ち主である太つちよのあの他国者の脂ぎった顎髭をひつつかんでうちぶつてくれたらいいのに」と、マギーはすぐく腹立たしく思うことがあった。

彼はぞっとするほど気持ちが悪く男だった。踵の低い靴に真っ白の靴下を履いていた。そうして、一日中クツション

付きの肘掛椅子にどっぷりと座り込んで、文句ばかり言っていた。誰もかれもが彼の財布に入っている札束のせいで、彼の言うことに黙々と従っているのだった。

「何のために、この俺が一週五ドルも払っていると思ってるんだ？ 遊ばせてやるため？ とんでもないぞ！」これが彼の言い草だった。

マギーはピートのことを何でも話せる友だちがほしかった。彼のあのいつもの癖を、頼りがいのある友だちと話すことができたなら、どんなにいいだろうと思つた。

家では母は昼間から酒浸りだったし、いつも文句ばかり言つていた。母は、世間からのけ者にされたかのように、何かにつけて周囲に当たり散らした。それはあたかも、世間に復讐しているかのようなようだった。そうして、これは自分のものだからどうしようが勝手なんだというように家具をぶつ壊したりした。

近くにヘブライ人の経営する質屋があつた。その屋根には三つの金メッキをしたボールの看板がかかつていた。母がこの質屋に家の小物を持っていくときは、悲壮な表情をしていた。これらの質物は、ユダヤ人たちがすべて利息でがんにがらめにしてしまうのだ。

ジミーは外でにっちもさっちもいなくなると、仕方なくいつもの路を通つて家に帰つてきた。どこかよそに行つてしまいたい夜もあった。それでも怪しい足取りながら戻つて来るとベッドに潜り込んだ。

マギーにとつては、さつそうと歩くピートの姿は燦然と輝

く太陽そのものだった。

ピートはマギーを町の博物館に連れて行つたことがあつた。しかし、そこには、およそ思いもしない人々が列をなして並んでいて、マギーはびつくりした。マギーは彼らを恐る恐る眺めたが、彼らはいわゆる選ばれた人々なんだと思つた。ピートは他にも面白いところはないのかと知恵を絞つた。そうして、中央公園にある見世物の動物園と美術館を思い出した。日曜日の午後になると、時々二人の姿がそこに見られた。

しかし、ピートは何を見ても特に関心を寄せている風情はなかつた。というのは、彼は生気のない表情でぼんやりと立ち尽くしていたのだ。一方マギーは楽しそうに笑いながら物珍しげにあれこれ見物するのだった。

いつだったか、移動動物園で、ピートはかわいい猿のしぐさを見て、うっとりとしていた。その猿が他の猿から尻尾を引つ張られた。ところが、その猿が振り向くのが遅く、どの猿が引つ張つたのかわからない。するとその猿は檻の中の猿を睨み付けて居丈高になつた。ピートはその猿をそのかして大きなサルと喧嘩させようとしたりした。

一方、美術館に行ったときは、マギーは、
「あら、ほんとにすてき！」

とひどく感嘆した。

「なんだつて？ ばかなこつた！ まあ、来年の夏まで待つてなよ。ピクニックに連れて行つてやるからさ」

ピートが傍でいらだたしげに言つた。

マギーが円形天井の部屋々々を見て回っているとき、ピートは、展示品の警備員に偶然出会った。警備員は疑わしい目つきでピートを見つめた。するとピートは、反発するように鋭く睨み返すのだった。そうして彼は大声で、

「あのとんま野郎の目つたら、ガラス玉のようだぜ」と憎々しげに言ったりした。

ピートは周囲に慣れてくると、退屈しのにぎに、ミイラの傍に行つて、マギーに何やらご託を並べ立てたりした。

ピートはふつう興味のない展示物には何も言わないで、ちよつと威厳を持つたそぶりでもやりすごした。しかし、時には、我慢できないで口にするこもあつた。あるとき、ピートは「おや？」と聞きただすように言つた。「おい、ごらんよ！ここにある小さな水差しを見るんだ！一列に百個も並んでいるぞ。一ケースに十列だぜ。ケースも千個ほどあるぞ。いたい何のためにあるんだ？」

ピートは週日の夕刻に、しばしばマギーを連れて芝居を見に行つた。騎士道精神に溢れたヒーローが、悪徳の後見人の豪華な屋敷に捕らわれの身となつて美しきヒロインを救い出すというスク립トだった。

ヒーローはニッケルメッキの拳銃を手にして、年老いた異邦人たちは悪人の手から救い出すなど、吹雪の舞い散る中で、ずぶ濡れになつて大活躍した。

マギーは幸福の証である教会の窓際で、吹雪に打たれながら倒れていく異邦人に痛く同情した。教会の中からは聖歌隊が歌う「もろびとこぞりて」が流れてきた。マギーや観客

にとつては、これ以上の現実は無かつたのだ。

喜びは常に心の問題であり、観客は役者と同様いつもその外にいる人間だった。彼らはドラマを見て、想像上のあるいは現実の状況に心から同情して感動するのだった。

マギーは劇中で役者が演じる権力者の尊大さや頑固さが迫真に迫つておもうと思つた。役者のセリフがその権力者の身勝手さをあらわに表現するとき、天井桟敷の観客はこの権力者に呪いの言葉を投げつけた。もちろんマギーもそれに同調した。

観客の中に混じつて怪しげな人物も、劇中で演じられる悪行には野次を飛ばした。観客は、執拗に劇中の悪行に非難の声を浴びせかけ、白馬の騎士には拍手喝さいするのだった。明らかに犯罪人とみられる観客でさえも、劇中の正義の味方に声援を送つていた。

天井桟敷の観客は、不幸な者や虐げられた者に強い同情心を示した。彼らは正義の味方を熱狂的に声援し、悪役を罵り、彼の頬髯をはやし立て彼を目立たせた。誰かが吹雪の中で命を落とすと、観客は嘆き悲しんだ。ありもしない悲劇を追い求め、今の自分と重ね合わせてその悲しみをしっかりと抱きしめるのだった。

劇中のヒーローは、幕開きの貧困から艱難辛苦して富を勝ち得て勝利者となる。大詰めになると、彼は今まで立ちふさがつてきた敵をすべて許すのだ。ヒーローは常に天井桟敷から声援を受けながらステージで派手な役回りをした。

観客は彼の鮮やかで気品のある心情に拍手した。一方で、

悪役に対しては、的外れのひどい悪態をつきそのセリフを妨害するのだった。

悪役を演じる役者たちはあらゆるシーンで観客を敵に回した。役者が善行と悪行のちよつとした違いを示すセリフを言おうものなら、観客はすぐに役者が悪者であることを感じ取って、一斉に罵倒した。

終幕になると、観客の英雄であり弱い者の味方である清貧のヒーローが、ポケットに債券をいっぱい詰め込んでどんな苦難にもへこたれそうもない悪者や金持ちを打ち負かすのだった。

マギーはいつもこんなメロドラマの見せ場に感動しながら劇場を後にした。貧乏だが心正しい者が最後には金持ちの悪者をやつつけるスク립トに感激した。

マギーはこんな芝居を見るにつけ、いろんな思いが駆け巡った。彼女は、長屋に住みつきシャツ工場で働いている自分に、ヒロインが舞台で大げさに演じてくれたあのような賢明さや上品さがなくとも悔しかった。

数人の悪ガキが居酒屋の裏口にたむろしている。

彼らは目を輝かせ何かを待ち望んで、指を盛んにぼきぼきと折り曲げていた。

「やって来るぞ」

突然一人が叫んだ。彼らは一斉にバラバラと散った。そうしてほどほどの半円状に広がると、らんらんと目を輝かせて一点を見つめた。

酒場のドアがバタンと開いて一人の女が現れた。女の灰色の髪はもつれ肩まで下がっている。顔は赤く染まり汗がにじみ出ている、眼はキラキラと光っていた。

「あんたたちにはやあ、もう一銭も払わないよ。絶対にね。今まで三年も買ってやったのに・・・『もう何も売らない』って言い草には我慢できないね。あたしが何をしたっていうのよ？ ジョニー・マーカー！ 『妨害、妨害』って、何よ？ いったいなんだよ。ジョニー！」

居酒屋の中から誰かがドアを蹴った。女はドタリと歩道に倒れた。半円を作って見ていた悪ガキが興奮して一斉に騒ぎ出した。彼らは小躍りしてはやし立て、わめき知らし、からかいの声を上げた。悪ガキの顔には野卑な嘲笑があふれていた。

女は目立って横着な数人の悪ガキに向かって走り寄った。

彼らは肩越しにケラケラと笑って、からかいながら、少し輪を広げて散らばった。女は縁石の上でちよつとよろめきながら、大声で喚いた。

「こん畜生め！」

女はこぶしを振り回しながら怒鳴る。すると悪ガキたちが、またわつとはやし立てる。女が歩道を立ち去ろうとすると、悪ガキたちは、わいわいしゃべりながら後を追って行つた。

女は時々後戻りしては、悪ガキたちを威嚇した。彼らは素早く逃れて、これでもかというように女を囓し立てた。女

は薄汚れたドアの前で、一瞬振り向くと、彼らに向かつてわめいた。女の髪の毛は乱れ、狂わんばかりの表情だった。

女は震えるこぶしを盛んに振り回した。女が背を向けて立ち去り始めても、彼らはその背中に向かつて盛んに罵声を浴びせかけた。

やがて、女が視野から消えると、悪ガキたちは、三々五々もと来た道に戻っていった。

女はアパートの一階でうろろしていたが、やがてもたく足で二階に上って行つた。二階の部屋では数人の住人がより固まつて、女をじつと見ていた。女は、怒つたようにドアの方を睨み付けた。すると、ドアは急に閉まつて力ギのかかる音がした。

女はちよつとたじろいだが、ドアの羽目板に向かつて興奮して怒鳴り散らした。

「文句があるんなら廊下に出てきたらどうなのよ？ メアリー・マーフィー！ 出てくるんだよ！ ねえ、どうなんだ？ 喧嘩したいんだらう？ ねえつたら！ 太つちよのテリヤ女め！ 出てこいってんだよ！」女は大きな足で何度もドアを蹴り続けた。「出てきて勝負するんだよ」と空を仰いで大声を張り上げた。

女のヒステリックな喚き声を聞きつけて、周囲のドアが一斉に開き、「何ごと？」という表情をした多くの顔が現れた。女の視線はあらゆる方向に走り、こぶしを何度も空中に高くと振り上げた。

「出てくるんだよ！ いいかいみんな出てくるんだよ！」

女は見物人たちに向かつて喚きたてた。

その喚き声に答えるかのように、ドアから顔を出している見物人の中から罵つたり、からかつたり、嘲る声が上がると、女に小石を投げつけた。小石は女の足元にばらばらと転がった。

「母ちゃん！ 一体全体どうしたんだよー？」

暗闇から怒鳴り声が聞こえた。一人の若者が姿を現した。息子のジミーだった。彼はブリキの弁当箱を手にして、駈者が使う茶色のエプロンを脇に抱え込んでいた。

「どうしたんだよ！」

彼はまた答めるように尋ねた。

「出てくるんだよ！ あんたたち、みんな出て来いっていうんだよ！」母親は相変わらずいきり立っている。「出てくるんだよ！ 顔をぐちゃぐちゃにして床に擦り付けてやる！」

「もういい加減にして、内に入ってくれよ！ ねえつたら！」と、ジミーが母親を叱りつけるように言った。母親はつかつかと彼の傍に来ると、彼の顔を引つ掻こうとした。彼女の怒りは頂点に達して、今にもジミーに飛びかからんばかりだった。

「お前なんか、知つたことじゃないよ！ この小童め！ お前は何様なんだよ？ お前のためには指一本使わないぞ！ 覚悟するんだね！」

彼女は大声でジミーに向かつて喚いた。

彼女はジミーに軽蔑のまなざしを向けると、くるりと大きな背中を向けて階段を上がっていった。ジミーは母親の後

を追いかけていつて傍に来ると、その腕をつかんで部屋の方に引つ張っていった。

「うちへ帰るんだよ！」

彼は歯ぎしりするように言った。

「離すんだよ！ 手を放せっていうのよ！」

母親は金切り声で叫ぶと、こぶしを振り上げて息子の顔面で振り回した。ジミーはその拳をさっとかわすと、拳はうなじに当たった。

「うちへ帰るんだよ！ うちにだよ！」

彼はまた歯ぎしりして叫んだ。

「手を放せ！ お前、手を放すんだよ！」

母親はわめきながら、息子の顔面に向かつて骨太の拳を振り回した。彼は左手で母親の胸を締め付けた。母親と息子はローマ時代の剣士のように、身をそらせながら争った。

「始めたぞ！」と、ラム横丁の長屋の人々が囁し立てる。廊下には物見高い人々が集まっている。

「ねえ、ねえ！ おばちゃん。今のは見ものだったよ！」

「俺は、赤いほうに賭けるぜ！」

「なんだ？ 喧嘩なんか、いい加減やめてくれ！」

ジョンソンのうちのドアが開くと、マギーが顔を出した。ジミーは大声を張り上げて、母親を部屋に押し込むと同時に自分も後を追うように入って、すぐにドアを閉めた。

ラム横丁の長屋の住人たちは、がっかりしたような表情で、口々に罵りながら自分の部屋に戻っていった。

母親はゆっくり床から起き上がった。彼女の目は威嚇す

るようにぎらぎらと輝き、ジミーをにらんでいた。

「ねえ、もうよしなよ」ジミーは言った「これで十分だろう？ ここに座つたら？ もうトラブルなんて起こさないでくれよ！」

彼は母親の腕を掴んで振ると、無理やりに古ぼけた椅子に座らせた。そのとたん椅子がギイギイときしんだ。

「手を放してくれよ！」

母親は色をなして言った。

「おとなしくするんだよ！」

ジミーが怒ったように言った。マギーは悲鳴を上げて隣の部屋に逃げ込んだ。すぐに何かが壊れる音がして、罵り声が聞こえてきた。最後にどしんという音がしてジミーの叫び声が聞こえた。

「頼むからじつとしてくれよ、母ちゃん」

マギーはドアを開けてそっと外へ出ながら「ジミーって、うるさいのね」と、ひとり呟いた。

ジミーは壁に寄りかかって、相変わらず母親を説得していた。その節くれた二の腕には血がにじんでいる。つかみ合いの時に床や壁で擦り切った傷に違いなかった。母親は床に横たわって喚いている。その顔には涙が溝を作っていた。

マギーは周囲を見渡した。いつものように、テーブルや椅子がひっくり返っている。茶わんは粉々になつて床に散らばっていた。

ストーブは足が壊れて、無残にも傾いていた。床が水で濡れているのは、桶がひっくり返つたからだだった。

ドアが開くと、ピートが現れた。彼は肩をすくめた。

「おっ、すげえな」と、彼は言った。彼はマギーの傍に来ると耳元に口を近づけて言った。

「なに、大丈夫だ、マッグ、さあ、そんなに気にすることはないんだ」

片隅にいた母親が頭を上げてもつれた髪の毛を二、三度振った。そうして薄暗がりの中で、娘を睨み付けながら言った。

「うっ、このごくつぶし！ 二人ともどっかへ出て行ってくれ！」という鋭いまなざしでマギーを睨んだ。その眼には憎しみの炎が燃え盛っている。「お前は落ちるところに落ちてしまったんだ！ マッグ・ジョンソン、もうだめだよ、お前はうちの恥さらしだ！ とつとと出て行きやいいんだよ、とつととね。できそこないのあいつと一緒に楽しむんだね。でもね、お前たちには地獄が待ってるだろうよ」

マギーは母親を見つめ続ける。

「さあ、出ていくんだよ、出て行ったらわかるさ！ 世間がどんなもんかがね。お前のような娘なんか、いなくつてもいいんだよ！ さあ、出ていくんだよ、さつさと！」

マギーは震えだした。

すると、ピートが口をはさんだ。

「なんだよ！ いいんだよ、マッグ、心配するなつて！」彼は小声でマギーの耳もとで囁いた「心配することなんかないんだ！ お前の母ちゃんも朝になったら元の母ちゃんになつてるさ。さあ、おれと一緒に行くんだ！ 楽しいことだつて

あるさ！」

母親が床に寝つ転がったまま、また喚いた。ジミーはかすり傷だらけの前腕を見つめている。マギーは、いろんなものが壊れて散らばっている部屋に目をやった。そうして赤らんだ体をのたうち回らせている母を見た。

「さつさと、出ていくんだよ！ いいかい？」

マギーは家を去った。

(未完)